近代地理学研究の流れを展望する――
学史上注目に値する地理学文献を編集復刻。

日本の地理学文献選集(II)

――近代地理学の形成――

全8巻　岡田俊裕 編・解説

クレス出版

刊行のことば

高知大学教育学部教授（地理学）
岡田俊裕

京都と東京の帝国大学に地理学の講座が設けられたのは、それぞれ一九〇七（明治四〇）年と一九一一（明治四四）年であった。これを機に日本の近代的・専門的な地理学（近代地理学）が形成されていったと考えられる。そして、一九二四（大正一三）年に地球学団が京都で、翌一九二五年に日本地理学会が東京で組織され、これらの学会を中心に地理学研究が展開され始める。本叢書は、この間の近代地理学の形成期に発表された主要な論著のオリジナルを精選して構成されている。

近代地理学の形成者のうち、最も重要な貢献をしたのは山崎直方（一八七〇～一九二九）と小川琢治（一八七〇～一九四一）であった。山崎は東京帝国大学教授で東京高等師範学校教授を兼ね、その研究の射程は地形学にとどまらず、地誌・政治地理・地理教育にまで及び、「南洋」に強い関心をもった。京都帝国大学教授の小川は、地勢・地形の研究のほか、地図史・歴史地理・集落地理・戦争地理の諸分野を開拓し、中国を注視し続けた。

山崎・小川よりも数歳年少の中目覚（一八七四～一九五九）・小田内通敏（一八七五～一九五四）・石橋五郎（一八七六～一九四六）の貢献も大きかった。中目は広島高等師範学校教授で、在任中三年にわたって京都帝国大学に隔週出講した人物である。しかしその存在は、長く忘れ去られてきた。京都帝国大学の石橋は、人文地理なかでも経済地理・政治地理などの研究に深まりを見せた。一方、小田内は高等教育機関の専任教官にはならず、実証的な集落・地域研究で高い到達を果たした。

これら第一世代の人たちの薫陶を受けて第二世代の研究者が育ってくる。小川のもとで田中秀作（一八八五～一九六三）、石橋のもとで内田寛一（一八八八～一九六九）や小野鉄二（一九〇〇～一九四九）、山崎のもとで辻村太郎（一八九〇～一九八三）・大関久五郎（一八七五～一九一八）・西田与四郎（一八八四～一九五二）らが、それぞれ師の学統を継承し発展させていく。

初等・中等学校の教師の優れた研究も現れた。牧口常三郎（一八七一～一九四四）の地理教育の探求、西亀正夫（一八八三～一九四五）の地理学の体系化、三沢勝衛（一八八五～一九三七）の実証的な地理学研究などがそれである。

明治末から大正期にかけて日本の地理学は本格的な発展をとげる。それはおもに帝国大学と高等師範学校においてであったが、そこには身をおかない独学の徒の奮闘も見られた。本叢書によって、この多彩な地理学研究の流れを臨場感をもって展望していただけたらと思う。

第1巻　山崎　直方

土人の風教

人口の増加せぬこと

何れの島でも食物に不足はない、土人は「パンの實」や「タロ薯」「ヤム薯」を常食としてをる、自然は常に饒かに之を供給してをるから、渠等は營々として食物の爲めに特に勞働する程のともない。衣服や住所に對する慾望とても多くないから兎角安逸である、暢氣である、之に勞役を課しても其効果は内地人の三分の一に過ぎぬと云はれてをる。人口増加を好まぬことは殊に斯る邊陬未開の地には有り勝ちのことで、男子の去勢、婦人の水浴など避姙の術も行はれ、花柳病其他皮膚病の少からぬこと、時には又激浪の來襲するなど、種々殃をなして人口の増加を妨げ、或は之が減少を促す處もあると云ふことである。一夫多妻とか離婚再婚とかは尋常茶飯事の樣に心得て居て渠等の道徳はまだ低級で

土人の風教

第3巻　中目　覚

バルカン旅行談

ドナオ河を下るの記

ドナオの河、源を獨逸のシワルツワルドに發して獨逸墺地利セルビヤ・ロマニヤ・露西亞の六國に亘り、或は其中を貫き或は其國境を流れて黑海に注ぐ迄實に二千九百粁。其沿岸の人民には何處より來りて何處へ去るか知らぬ者多く、又古來歐亞幾多の民族の盛衰を支配したが中世以前にありては其史蹟明かでない。其沿岸に傳はる傳説などには神秘的の點少くない。中でも尤も神秘的なのは獨逸の「ニーベルンゲンの歌」である。而して茲に歌まれた事實は七百年と雖ども

日本の地理学文献選集(II)　全8巻構成

第1巻　山崎　直方
「氷河の話」（一九〇八年）
「古代地理学に就きて」（一九一〇年）
「欧州地理学界の近況」（一九一二年）
「高等中学校の地理学科に就きて」（一九一三年）
「アジアに於ける気候と人生との関係」（一九一三年）
「氷期に関する論争」（一九一三年）
「北イタリアの湖水」（一九一三年）
「飛騨山脈に於ける氷河作用に就て」（一九一四年）
「高山に於ける雪の営力Nivationにつきて」（一九一四年）
「地理学説の進歩と中等教育」（一九一四年）
「独仏の国境」（一九一五年）
『我が南洋』（一九一六年、広文堂書店）
「風景画につきて」（一九一六年）
「大陸の単元につきて」（一九一六年）
「ルーマニヤ人とルーマニヤ」（一九一七年）
「地形と文化との関係を説明せるリッチ氏の新研究」（一九一八年）
「時代と地理学」（一九一八年）
「丹那盆地の地形につきて」（一九一九年）
「国民教育に於ける地理学」（一九一九年）
「平和条約に伴ふ独逸の損失」（一九二〇年）
「地殻漂移説につきて」（一九二二年）

第2巻　小川琢治・田中秀作
小川琢治
「長白山附近地勢及松花江水源」（一九〇九年）
「近世西洋交通以前の支那地図に就て」（一九一〇年）
「戦略地理上より観たる漢口附近の地勢」（一九一一年）
「支那上古の地誌として禹貢と山海経の価値」（一九一二年）
「支那上古の天地開闢及洪水伝説」（一九一三年）
「信濃国梓川の氷河遺跡」（一九一四年）
「常念山脈南部に於ける氷河作用に就て」（田中秀作共、一九一四年）
『越中国西部の荘宅 Homesteadsに就て』（一九一四年）
『近畿地方の土地と住民』（一九一五年、京都府教育会）
「支那戦国以前の地理上智識の限界」（一九一五年）
「山東省経営の私見」（一九一五年）
「戦争の地理学的意義及び其研究に就て」（一九一六年）
「戦時の欧州地理学界」（一九一六年）
「崑崙と西王母」（一九一六年）
「日支経済関係の将来」（一九一六年）
「黄河水源問題」（一九一六年）
「黄河下流平地の戦略地理的意義」（一九一六年）
「支那ノ鉱産ニ就テ」（一九一七年）
「戦争地理学に与へたる世界戦争の教訓」（一九一八年）
「水経と水経註」（一九一八年）
「欧州西部戦場の地理観」（一九一九年）
「支那に於ける本草学の起源と神農本草経」（一九一九年）
「支那上古の開闢伝説補遺」（一九二一年）
「東西文化民族の地震に関する神話及び伝説」（一九二四年）
田中秀作
「信濃梓川渓谷に於ける氷河遺跡に就て」（一九一六年）

第3巻　中目　覚
「鹿児島宮崎旅行談」（一九一五年）
「氷河問題に就きて」（一九一六年）
『バルカン旅行談』（一九一六年、中目覚）
『バルカン旅行談附録』（一九一七年、三省堂）
『樺太の話』（一九一七年、三省堂）
「氷河と飢饉」（一九一七年）
『樺太の植民』（一九一八年）
「欧州の戦場と天候」（一九一九年）
『小樽の古代文字』（一九一九年、地理歴史学会）
「国民道徳の地理的要素」（一九一九年）
『アルプス山とライン河』（一九二〇年、中目覚）
『地理的刺激』（一九二一年、中目覚）

第4巻　小田内通敏
『我が国土』のうち「国土の特殊研究」を除く全て（一九一三年、長風社）
「郊外戸塚村の変遷」（一九一四年）
『朝鮮部落調査予察報告　第一冊』（一九二三年、朝鮮総督府）
『朝鮮部落調査報告　第一冊　火田民　来住支那人』（一九二四年、朝鮮総督府）

第5巻　石橋五郎・内田寛一・小野鉄二
石橋五郎
「地理学及其分科の名称に就きて」（一九〇八年）
「港の盛衰」（一九〇八年）
「独逸地理学界消息」（一九一一年）
「気候ト世界経済」（一九一三年）
「運河の発達と巴奈馬開鑿の意義」（一九一四年）
「武庫附近聚落の変遷」（一九一四年）
「欧米に於ける人文地理学と其の研究法」（一九一四年）
「郷土保存に就いて」（一九一四年）
「爪哇の気候と住民の生活」（一九一七年）
「有史時代の気候変化」（一九一八年）
「独逸領土変動の意義」（一九二〇年）
「戦後に於ける国際貿易の趨勢」（一九二一年）
「維新前後に於ける外国貿易に就いて」（一九二三年）
「明治年間の外国貿易額に就いて」（一九二四年）
小野鉄二
『大正九年十月一日現在　大日本郡市別人口密度表　近畿地方町村別人口密度表』（一九二五年、柳沢統計研究所）
「「南洋」の意義」（一九一四年）
「南洋新占領地の経営に就て」（一九一五年）
「我カ占領南洋諸島視察概報」（一九一六年）

第1巻　山崎　直方

土人の風教

何れの島でも食物に不足はない、土人は「パンの實」や「タロ薯「ヤム薯」を常食としてをる、自然は常に饒かに之を供給してをるから、渠等は營々として食物の爲めに特に勞働する程のともない。衣服や住所に對する慾望とても多くないから兎角安逸である、暢氣である、之に勞役を課しても其効果は内地人の三分の一に過ぎぬと云はれてをる。人口增加を好まぬことは殊に斯る邊陬未開の地には有り勝ちのことで、男子の去勢、婦人の水浴など避姙の術も行はれ、花柳病其他皮膚病の少からぬこと、時には又激浪の來襲するなど、種々殃をなして人口の增加を妨げ、或は之が減少を促す處もあると云ふことである。一夫多妻とか離婚再婚とかは尋常茶飯事の様に心得て居て、渠等の道德はまだ低級で

人口の增加せぬこと

第3巻　中目　覚

バルカン旅行談

ドナオ河を下るの記

ドナオの河、源を獨逸のシワルツワルドに發して獨逸・墺地利・セルビヤ・ロマニヤ・露西亞の六國に亘り、或は其中を貫き或は其國境を流れて黑海に注ぐ迄實に二千九百粁。其沿岸の人民には何處より來りて何處へ去るか知らぬ者多く、又古來歐亞幾多の民族の盛衰を支配したが中世以前にありては其史蹟明かでない。其沿岸に傳はる傳說などには神秘的の點少くない。中でも尤も神秘的なのは獨逸の「ニーベルンゲン」の歌である。而して玆に歌はれた事蹟は此河を舞臺として演ぜられたものが多い。同じ中部歐羅巴の河でありながらラインには神秘的の分子が少ないが此ドナオに至りては甚だ之れに富んで居る。神秘的の事柄は之れを研めて見たいといふが人情で、私は獨逸文學史の研究中「ニーベルンゲン」の歌を讀んだ時、始めて維也納に於て此河に臨んだ時、一度は此河を河口まで下りて見たい

第7巻　牧口常三郎

第二章　郷土科特設の必要を論ず

第一節　砂上樓閣の地理教授と郷土科

試に尋常小學地理の第一頁を繙け。題目が旣に「大日本帝國」で、其の課の欄外の見出しに「我が國の位置、成立、廣袤、氣候、產物、住民」「行政上の區分」「地勢上の區分」といふ様な地理特有の六ヶ敷い、恐らくは專門學上の智識の多少あるでなければ、大人にでも解り兼ねる程なる文字、事柄が列擧されてあるではありませんか。それだけにても最早澤山であらうが、尙ほ本文を一瞥すると、「亞細亞洲」「東部」「位し」「東北」「西南」「連れる」「列島」「東洋」「突出」「半島」「より成る」「本州」「四國九洲」「島島」「一千二百里」「全國」「面積」「方里」「隔てゝ」「對し」「亘りて」「相望む」「接近し」「運り」「控ふ」「增し」「氣候」「一般に」「溫和」「雨量多く」「農產物」「水產物」「住民」「民族」「萬世一系の天皇」「戴き奉り」「忠君愛國の心」「富む等」があります。

僅か數頁の課程の中に際限もなく抽象的の六ヶ敷い言語、事柄が續々ある

「黄河下流水源問題」（一九一六年）
「黄河下流平地の戰略地理的意義」（一九一六年）
「支那ノ鉱產ニ就テ」（一九一七年）
「戰爭地理學に与へたる世界戰爭の教訓」（一九一八年）
「水経と水経註」（一九一八年）
「欧州西部戰場の地理觀」（一九一九年）
「支那に於ける本草學の起源と神農本草経」（一九一九年）
「支那上古の開闢伝說補遺」（一九二一年）
「東西文化民族の地震に関する神話及び伝說」（一九二四年）

田中秀作
「信濃梓川渓谷に於ける氷河遺跡に就て」（一九一六年）

第3巻　中目　覚

「鹿児島宮崎旅行談」（一九一五年）
「氷河問題に就きて」（一九一六年）
『バルカン旅行談』（一九一六年、中目覚）
『バルカン旅行談附録』（一九一七年、三省堂）
『樺太の話』（一九一七年）
「氷河と飢饉」（一九一七年）
「樺太の植民」（一九一八年）
「欧州の戰場と天候」（一九一九年）
「小樽の古代文字』（一九一九年、地理歴史学会）
「国民道德の地理的要素」（一九一九年）
『アルプス山とライン河』（一九二〇年、中目覚）
『地理的刺激』（一九二一年、中目覚）

第4巻　小田内通敏

『我が国土』のうち「国土の特殊研究」を除く全て（一九一三年、長風社）
「郊外戸塚村の変遷」（一九一四年）
『朝鮮部落調査予察報告　第一冊』（一九二三年、朝鮮総督府）
『朝鮮部落調査報告　第一冊　火田民　来住支那人』（一九二四年、朝鮮総督府）

第5巻　石橋五郎・内田寛一・小野鉄二

石橋五郎
「地理学及其分科の名称に就きて」（一九〇八年）
「港の盛衰」（一九〇八年）
「独逸地理学界消息」（一九一一年）
「気候ト世界経済」（一九一三年）
「運河の発達と巴奈馬開鑿の意義」（一九一四年）
「武庫附近聚落の変遷」（一九一四年）
「欧米に於ける人文地理学と其の研究法」（一九一四年）
「郷土保存に就いて」（一九一四年）
「爪哇の気候と住民の生活」（一九一七年）
「有史時代の気候変化」（一九一八年）
「独逸領土変動の意義」（一九二〇年）
「戰後に於ける国際貿易の趨勢」（一九二一年）
「維新前後に於ける外国貿易に就いて」（一九二三年）
「明治年間の外国貿易額に就いて」（一九二四年）

小野鉄二
『大正九年十月一日現在　大日本郡市別人口密度表　近畿地方町村別人口密度表』（一九二五年、柳沢統計研究所）

内田寛一
「「南洋」の意義」（一九一四年）
「南洋新占領地の経営に就て」（一九一五年）
「我カ占領南洋諸島視察概報」（一九一六年）
「亜米利加合衆国のパナマ運河利用と其反動的活動」（一九一七年）
「西比利亜の河川と北極海との連絡航路」（一九一九年）
『大戰後の世界地理概観』（一九二〇年、右文館）

第6巻　辻村太郎・大関久五郎

辻村太郎
「日本アルプスと既往の氷河」（一九一一年）
「本邦のカールは氷河之を形作りしや否や」（一九一三年）
「火山島嶼の蝕磨輪廻」（一九一七年）
「天竜川流域の地形」（一九一九年）
『地形学』「緒論」、「地理学的輪廻」、「海蝕輪廻」の部分収録（一九二三年、古今書院）
「日本の高山形」（一九二三年）
「断層崖及び断層線崖」（一九二三年）

大関久五郎
「ヘットナー石」、「信州の氷成粘土」（一九一五年）
「梓川渓谷島々附近の地形に就て」（一九一五年）
「再び梓川渓谷島々附近の地形に就て」（一九一六年）
「梓川上流上高地盆地四近の地形に就て」（一九一六年）
「梓川上流上高地盆地四近の地形（続稿）」（一九一六年）
「飛騨山脈の中心に横はれる双六・三俣山塊の地形に就て」（一九一六年）
「氷河に取巻かれて」（一九一六年）
「日本に於ける万年の雪」（一九一七年）
「羽前国月山の万年雪に就て」（一九一七年）
「木曽駒ヶ岳頂上の地貌」（一九一七年）

第7巻　牧口常三郎

『教授の統合中心としての郷土科研究』の部分収録（一九一二年、以文館）
『地理教授の方法及内容の研究』の部分収録（一九一六年、目黒書店）
『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂第十版の部分収録（一九三三年、創価教育学会）

第8巻　西田与四郎・西亀正夫・三沢勝衛

西田与四郎
『中等教育地理教授要義』の部分収録（一九一四年、三育社）
『現代の趨勢に鑑みたる地理教育の方針及実際』の部分収録（一九一八年、目黒書店）

西亀正夫
「聚落の研究」（一九一八、一九年）
「交通の地的研究」（一九二〇～二三年）
「九州の方言に就て」（一九二二年）

三沢勝衛
「諏訪製糸業の地理学的考察」（一九二二年）

日本の地理学文献選集(I)

―近代地理学の成立前夜―　全9巻

岡田俊裕 編・解説

第1巻　志賀　重昂

『南洋時事』（一八八七年、丸善商社書店）
『地理学講義』（一八八九年、敬業社）

第2巻　矢津　昌永

『日本地文学』訂正再版「気界」、「陸界」、「水界」、「日本ノ気候」の部分収録（一八八九年、丸善商社書店）
『日本帝国政治地理』訂正再版「総論」、「社会住民」、「生業物産」の部分収録（一八九三年、丸善株式会社書店）

第3巻　内村鑑三・新渡戸稲造

内村鑑三
『地理学考』（一八九四年、警醒社書店）

新渡戸稲造
『農業本論』第三版「農業の分類」、「農業と人口」、「農業と地文」の部分収録（一九〇〇年、札幌農学校学芸会蔵版、裳華房）

第4巻　小藤文次郎・山崎直方

小藤文次郎
「地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス」（一八八九年）
「阿波地理小誌」（一八八九年）
『地理学教科書』初版（一八九〇年、敬業社）

山崎直方
「台湾諸島誌を読む」（一八九六年）
「第七回万国地理学大会の景況」（一九〇〇年）
「氷河果して本邦に存在せざりしか」（一九〇二年）
「アメリカ旅行談」（一九〇二年）
「政治地理に就て」（一九〇二年）
「地理学現今の位置」（一九〇三年）
「本邦市邑の地理的組織に関する一二の例」（一九〇四年）
「フリードリッヒ・ラッツェル先生を悼む」（一九〇四年）
「高山の特色」（一九〇五年）
「遠江海岸の平原の地形につきて」（一九〇五年）
「清国山西省の地形に就きて」（一九〇五、六年）
「清国都邑の構造に付て」（一九〇六年）
「秋吉台のカルストに就きて」（一九〇六年）

第5巻　小川　琢治

「日本風景論を評す」（一八九五年）
『台湾諸島誌』（一八九六年、東京地学協会）
「地理学とは何ぞや」（零丁学人、一八九八年）
「欧羅巴旅行談」（一九〇一年）
「北清雑記」（一九〇二年）
「日本の文明に及ぼせる地理上の影響」（一九〇二年）
「人生に及ぼす地理学的影響」（一九〇四年）
「間宮林蔵先生の生涯と事蹟」（一九〇四年）

第6巻　歴史地理学者

河田　羆
「東京地理沿革考」（一八九三年）

坪井九馬三
「歴史地理とは何ぞや」（一九〇〇年）
『史学研究法』初版「第三　地理学」の部分収録（一九〇三年、早稲田大学出版部）

内田銀蔵
「日本古代の村落制に就きて」（一九〇〇年）

久米邦武
「歴史地理の根本に就て」（一九〇一年）

大森金五郎
「歴史地理研究の必要」（一九〇一年）

石橋五郎
「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」（一九〇一年）
「地学雑談」（稲湖生、一九〇三年）
「神戸港の今昔」（桜台生、一九〇五年）
「自然ト経済トノ関係」（一九〇六年）

吉田東伍
「江戸の古代地理」（一九〇三年）

喜田貞吉
「地理学に関する余輩の見解」（一九〇七年）

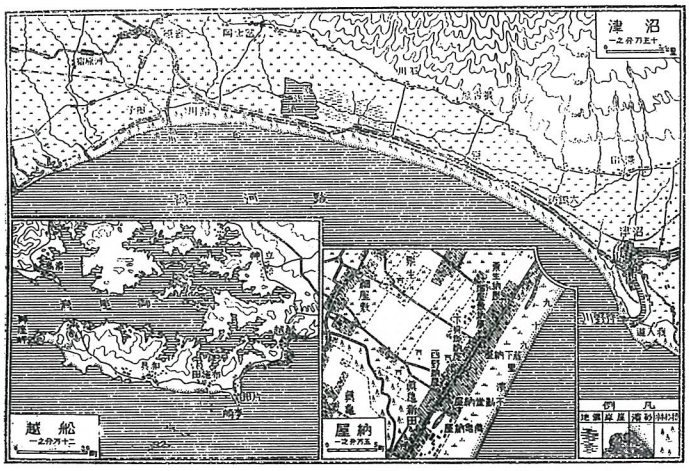
第7巻　『地理と歴史』　地理歴史学会発行　一

第8巻　『地理と歴史』　地理歴史学会発行　二

小田内通敏編集。『歴史地理』誌に対抗して発行（一九〇〇、〇一年）。執筆者は、小田内のほか三宅米吉・田中阿歌麻呂・野口保興・矢津昌永・佐藤伝蔵・奈佐忠行・三刀谷扶綱・内藤虎次郎・岩崎重三・石沢発身・吉田東伍など。

第9巻　牧口常三郎

『人生地理学』初版「緒論」、「第一編」、「第三編」、「結論」の部分収録（一九〇三年、文会堂）



揃定価九〇、〇〇〇円（税別）

日本の地理学文献選集(II) —近代地理学の形成— 全8巻

岡田 俊裕(高知大学教育学部教授) 編・解説

第1巻 山崎 直方
第2巻 小川琢治・田中秀作
第3巻 中目 覚
第4巻 小田内通敏
第5巻 石橋五郎・内田寛一・小野鉄二
第6巻 辻村太郎・大関久五郎
第7巻 牧口常三郎
第8巻 西田与四郎・西亀正夫・三沢勝衛

A5判／上製函入／クロス装 揃定価94,000円(税別)
平成19年8月末日刊行 ISBN978-4-87733-374-4(セット)

近代地名研究資料集 全6巻

池田末則(日本地名学研究所所長) 編・解説

第1巻	日本歴史及地理要覧	定価12,500円(税別)	ISBN4-87733-273-1
第2巻	帝国地名大辞典 上	定価20,000円(税別)	ISBN4-87733-274-X
第3巻	帝国地名大辞典 下	定価26,000円(税別)	ISBN4-87733-275-8
第4巻	大日本市町村案内	定価30,000円(税別)	ISBN4-87733-276-6

●第1巻～第4巻 全4巻 揃定価88,500円(税別) ISBN4-87733-277-4(セット)

第5巻	アイヌ語より見たる日本地名研究		
	アイヌ語より見た日本地名新研究	定価11,000円(税別)	ISBN4-87733-278-2
第6巻	町村名の研究	定価 7,500円(税別)	ISBN4-87733-279-0

●第5巻・第6巻 全2巻 揃定価18,500円(税別) ISBN4-87733-280-4(セット)

日本の人類学文献選集 近代篇 全8巻

山口 敏(国立科学博物館名誉研究員) 編・解説

第1巻	坪井正五郎・E.S.モールス ほか	定価16,000円(税別)	ISBN4-87733-292-8
第2巻	小金井良精	定価11,000円(税別)	ISBN4-87733-293-6
第3巻	八木奘三郎・足立文太郎	定価13,000円(税別)	ISBN4-87733-294-4
第4巻	鳥居龍蔵・濱田耕作・松村瞭(一)	定価12,000円(税別)	ISBN4-87733-295-2
第5巻	松村 瞭(二)	定価10,000円(税別)	ISBN4-87733-296-0
第6巻	長谷部言人(一)	定価11,000円(税別)	ISBN4-87733-297-9
第7巻	長谷部言人(二)・清野謙次	定価11,000円(税別)	ISBN4-87733-298-7
第8巻	昭和前期の研究者	定価11,000円(税別)	ISBN4-87733-299-5

揃定価95,000円(税別) ISBN4-87733-300-2(セット)

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5 メローナ日本橋
☎03-3808-1821 FAX03-3808-1822 http://www.kress-jp.com/
KRESS 株式会社クレス出版

●書店名